

一九二〇～三〇年代の大連詩壇における日中文化交流
 —李文権を通して見る詩壇の変遷—

王弘

はじめに

一九〇五年の日露戦争終結後、日本は大連を租借する。大連は租界であるが、実質的に関東都督府（後に関東庁）に管理される日本の植民地となる。満洲の玄関口という戦略的な位置づけにより、一九二〇年代以降の大連は、商工業の発達した近代都市となった。そして、日中の移民たちが大量に流入し、大連社会は新たな発展をしたのである。その発展は商工業の分野だけでなく、文学と芸術にも及び、日中の漢詩人は共同の詩宴を開き、漢詩のやり取りを含めた応酬活動を頻繁に行った。『遼東詩壇』（一九二四～三五^①）は、その応酬を通じて生まれた作品を掲載した月刊誌である。この雑誌に寄稿した日中の漢詩人たちのことを、「大連詩壇」と呼ぶこととする。

李文権（一八七八～一九三六^②）は、一九二五年に大連市長・杉野耕三郎（一八六九～？）の招きで大連に移住した。到着

後、日中関係に関心を寄せ、『盛京時報大連版』と『東北文化月報』の主筆として活躍していた。彼は大連詩壇に参加し、寄稿者数が一〇八二人を数える『遼東詩壇』へ、漢詩を寄稿する。その掲載数は計一一一首であり、一〇番目に多い採用数であった^③。その後、一九三二年まで、八年間の大連生活で同詩壇の盛衰を見届けた。本稿は、彼の目を通じて大連詩壇の発展とその過程を考察するものである。

一九二〇～三〇年代初頭の大連詩壇は、すでに日中の学术界で注目されていた。同詩壇の漢詩人について、入谷仙介^④は島根県の地方詩社「剪淞吟社」の状況をまとめ、日本本土の詩人と大連詩壇の交流を整理した。柴田清継^⑤と中嶋謙昌^⑥はそれぞれ、同詩壇の日本詩人・松崎鶴雄（一八六八～一九四九）と杉原謙（一八五八～一九三七）の活動を調査し、日中詩人の交遊について部分的に検証した。同詩壇の『遼東詩壇』については、孫海鵬^⑦と焦宝^⑧が中国研究者の視点から取り上げ、『遼東詩壇』の

実態を明らかにしている。また李勤璞⁹⁾は、当時の大連にあった詩社の一つである「嚶鳴社」が刊行した、詩集『嚶鳴社詩鈔』を整理した。大連詩壇に属する漢詩人の活動については、一九二二年に行われた詩宴「赤壁会」¹⁰⁾が卞東波によって分析されている。

従来の先行研究では、それぞれに大連詩壇の輪郭が描かれている。そのうち、孫海鵬、焦宝、卞東波では、同詩壇による交流の歴史的価値と文学的価値とを積極的に評価する。日中共同の大連詩壇では、「文化親善」は常に言及される言葉である。両国詩人たちが共通の文化認識を持っていたため、漢詩の創作が盛んになった。しかし、満洲事変の影響により、同詩壇は最終的には凋落していく。

先行研究が指摘するように、たしかに日中詩人間の文化交流は非常に盛んであった。その交流も、政治の衝突により強引に断絶されたといえる。しかし、本稿の結論を少し先取りして述べるならば、大連詩壇の繁栄とその背後には日中詩人間における、ある齟齬が潜在的に存在していたのである。日中詩人間における齟齬は、両国の政治衝突により拡大され、詩人たちは最終的にすれ違いの結末を迎えていく。この過程について、先行研究ではまだ十分に指摘されていない。加えて、中国漢詩人を対象とした研究もなされていないため、彼らの同詩壇に対する認識と態度は不明な点が多い。

そこで本稿では、大連詩壇における日中漢詩人の交流と、その凋落について論じていく。その際、とくに李文権の視点を通して同詩壇の発展とその過程に注目する。まず、大連漢詩人の文学活動について概観し、次に、李文権と中国人移民の大連に到来した状況を整理する。そのうえで、日中両詩人間の態度を検証し、両者における齟齬と、協力の過程を描く。最後に、大連詩壇の凋落と李文権ら中国人の大連退去を考察し、政治問題が同詩壇に与えた影響を捉えていく。本論は、先行論における『遼東詩壇』の研究中に、これまで扱われてこなかった詩集『連交唱和集』などにおける中国人たちの書いた序文や同誌の「詩壇漫筆」欄に掲げられた記事などにも注目し、また在連日本人の吉川鉄華（生没年不詳、詩人）と山口慎一（一九〇七—八〇、記者）の手記を併用し、細部の検証を行うものである。なお、原文引用中の括弧表記はすべて筆者による注記である。

一 大連詩人の文学活動

一九二〇年代から大連の文化は繁栄する。関東庁は文化機関を設立し、一九一四年に大連図書館を、一九九年に関東庁博物館を、二八年に満蒙資源館を開設した。民間の新聞雑誌が大量に発行され、四五年まで二九五種¹²⁾の創刊を数えることができる。文化芸術は発展し、例えば日本の伝統芸能である浄瑠璃が大連

の舞台上で上演されるなどしている。また、近代的な映画、美術、音楽も披露されていた。文学界においては、数あるジャンルの中でも、とくに小説、詩歌、隨筆が大連社会では流行した。⁽¹³⁾古川賢一郎の作品『蒙古十月』は当地の民謡を改編し、満洲の生活状況が反映されており、甲斐操や山内義雄などは、大連で異国情緒を漂わせる作品を執筆している。

このような状況下、漢詩もまた文学の一種として隆盛していた。大連では、浩然社、嚶鳴社、宗風社の三つの漢詩社がみられ、既に言及しているように『遼東詩壇』という専門誌が発行されていた。⁽¹⁴⁾『遼東詩壇』では、創刊から廃刊までに総計八一二首の漢詩が掲載されるが、その数からも、大連における漢詩の歓迎される程度が窺える。

二〇年代の日中社会の全体から見れば、大連詩壇の活動は異例と言えるだろう。日本では文言一致運動、中国では同時期の白話文運動の影響により、両国社会内部での漢詩文の創作は、一般的には衰退の傾向にあったと見てよい。欧米文化を受け容れた新しい世代の知識人たちは、漢詩文の素養が弱まり、その結果として漢詩の応酬唱和に対する興味も減じていた。大衆文化の代表である新聞雑誌からも、「漢詩欄」が續々と撤去されていた状況が認められる。⁽¹⁵⁾

しかし、欧米文化を中核とする「新文学」が知識人のあいだでは主流となったものの、漢文の素養を持ち、漢詩の創作を習

慣としていた文化人が消えたわけではない。逆に、これらの「旧知識人」と称される者たちは、文学界と学術界の中堅であった。⁽¹⁶⁾

大連詩壇はこのような社会環境で生まれている。以下に、同詩壇の内部状況について述べていきたい。浩然社は一九〇九年に設立され、大連の日本人を中心とするグループである。初期メンバーは二〇人であったが、来連する日本人移民の増加により拡大していた。成員は関東州の官僚と議員、新聞記者、文学者などがいたが、田岡正樹（一八六四～一九三六）⁽¹⁷⁾は同社の中心的人物であったとみなされよう。田岡正樹、字は子長、士長、号は淮海、高知県出身である。一九〇三年に中国に到着し、上海東亜同文書院で教師を、北洋講武学堂で翻譯官を務めていた。一〇年に大連に移住し、南滿洲鉄道株式会社調査課に勤務している。田岡は漢詩集『淮海詩鈔』を出版し、『遼東詩壇』を創刊した。大連詩壇の中でも中心的な詩人であり、日中の文化人を率いて、応酬を行った。

嚶鳴社と宗風社は中国人を中心とするグループである。嚶鳴社は一九二一年に広東省出身の実業家・胡子晋（一八七七～一九三〇）⁽¹⁸⁾によって結ばれた。胡子晋、字は喙公であり、満洲では「南洋兄弟煙草公司東三省分局」の局長を務めていた。『広東竹枝詞』『商隱廬集』『三遼吟草』などの詩集を執筆している。嚶鳴社の成員には、李文権（字は涛痕、道衡、新聞主

筆)、傅立魚(一八八二～一九四五、字は笠魚、新聞主筆)、黄越川(一八七七～一九五四、名は廣、字は越川、商人)、閻伝紱(一八九五～一九六二、字は紉叟、官僚)、陳錫庚(一八七五～一九四五、字は隱塵、教師)などがいた。嚶鳴社には機関誌がなく、成員の詩文は田岡の『遼東詩壇』に掲載されていた。二六年に出版された『嚶鳴社詩鈔』という四冊の詩文集が唯一の刊行物である。

宗風社は一九二六年に、『東北文化月報』の主筆・楊成能(一八七八～一九七二)により創立された詩社である。楊成能、字は新誠、浙江省錢塘の人である。中国各地の学校で教師を務めたことがあり、二〇年に大連の文化組織・滿蒙文化協会の責任者になっているが、二七年に大連を去っている。同社の成員と活動は嚶鳴社と重複する部分があるが、僅か二年間で、楊成能の大連退去に随い解体された。

これらの詩社は通常、詩宴の開催を主な活動とし、成員の歓迎会、送別会、誕生日会、追悼詩会で漢詩の唱和を行っていた。また、中国の伝統的な節句(上巳節や中秋節など)にも詩宴が開催され、歴史的に有名な文人活動の記念会(蘭亭の集會、赤壁会など)も行っていた。

一九三〇年に至ると、浩然社と嚶鳴社の成員は続々と高齢で亡くなり、あるいは大連を離れて他の都市に移住し、両社の活動は衰退の一途にあった。そのような中、田岡正樹は新たな詩

社「以文社」を結成し、元両社の日中詩人を新しい詩社に集めさせた。以文社は従来通りのやり方で三五年まで存続したが、三六年に田岡の死で解散することとなる。

大連詩壇の活動状況は主に『遼東詩壇』に掲載される。『遼東詩壇』は一九二四年に田岡正樹に創刊された月刊誌であるが、編集者には田岡の他、野村直彦(？～一九二八、号は柳洲、教師)、松崎鶴雄(一八六八～一九四九、号は柔父、図書館員)などがいた。同誌には「摘藻揚芬」「時事零墨」「詩壇漫筆」などの欄が設置され、大連詩人の詩作と日中両国からの漢詩寄稿が掲載された。同誌は大連唯一の漢詩雑誌であり、詩人たちの間をつなぐための役割をも担っていた。日中文化人の応酬活動の隆盛が原因で、日中両国内地の文人・政治家、西園寺公望、内藤湖南、鈴木虎雄、志賀重昂、陳三立、陳衍などの関心をも引き寄せ、『遼東詩壇』に寄稿している。他の当地のメディア、例えば、『泰東日報』や『盛京時報大連版』、雑誌『東北文化月報』などにも「漢詩欄」があり、文士たちの詩文が掲げられている。二〇～三〇年代に大連詩壇の漢詩交流は日中両国の注目を集めたと言えるよう。

二 李文権ら中国人移民の大連到来

李文権は北京の官僚の家庭で生まれ、幼い頃から父に広東省

梅州市の任地に連れられ、少年時代を過ごした。彼の父は二品大員の地位に授けられ、彼も国の人材になるように教育された。その期待を報いるため、優れた中国古典文化の素養を基に、一九歳で生員を、二四歳で挙人となっている。一九〇二年に京師大学堂が新式教育を展開し、彼は初代の中国本土で新式教育をうける学生として入学した。在学中に巖谷孫蔵や矢野仁一らに経済、法律、軍事知識を教わっており、そこで日本に対する関心が高められたのだろう。〇六年に卒業後、日本の文部省の招聘を経て東京高等商業学校の中国語教師として来日した。

在日期間中は、教師の職務を努めるかたわら、『中国実業雑誌』(一九二二～一九¹⁹)という中国語経済誌を創刊し、日本の経済情報を中国に発信した。また、教師と雑誌社社長の二つの側面のほかにも、一文化人とする彼は日本の詩人・松浦厚(一八六四～一九三四、号は鸞洲、貴族院議員)や大江孝之(一八五七～一九一六、号は敬香、新聞記者)などと漢詩の唱和を行っていた。『中国実業雑誌』では、「漢詩欄」が設置され、一〇七人の作者と三二九首²⁰の詩歌が掲載されている。文権は、仕事の関係で東南アジア、米国、日本各地に旅立ち、異国の風景と旅行中の情緒を詠じる漢詩を同誌に掲載した。その漢詩は次のようなものである。

怕聞人説婆羅洲 怕れ聞く 人の婆羅洲を説くを
 英北荷南版籍收 英北 荷南 版籍収む
 若使道乾今尚在 若し道乾をして今尚お在らしめば
 龍旗焉將不長留 龍旗 焉んぞ將に 長く留まらざらん
 (『過婆羅洲』『南洋群島商業研究会雑誌』一九二一年第二期)

この詩は一九二一年に彼は東南アジアのカリマンタン島(婆羅洲)に視察する途中に詠じられたものである。明朝の海賊林道乾(生没年不詳²¹)がまだ生きていれば、清朝の「龍旗」は南洋でひらめくようになる、漢詩の内容から列強の南洋進出に対する憤慨と文権の愛国心が読み取れる。来日初期に、彼は南洋華僑と連絡することを通じ、清朝政府の財政問題を解決しようと考えていた。明朝中国は南洋に対する支配力が強く、それと対照的に列強の進出により、清朝の国勢が弱体化した。彼の漢詩から、その遺憾の気持ちが窺える。

一九一七年に帰国後、文権は北京に滞在していた。しかし、その生活は長く続かなかつた。軍閥による内戦の影響で、転居を余儀なくされたのである。一九二〇年代前後、中国国内の政治環境が不穏となる。これは、皖系、直系、奉系の軍閥が北京政権の取得をめぐり、争っていたことによる。一九二〇年に直皖戦争、二二年と二四年に二度の奉直戦争が起こる。他方、南

方の広東政府が北洋軍閥の打倒を目指し、二二―二八年まで三回の北伐を行った。一九二八年に蒋介石は中国の統一を宣言し、政局は一旦安定した。

このような戦争状態の中、華北地域は何度も戦場になった。その影響を受け、文権は一九二五年に大連に避難した。同時期に來連する中国人が多かった。大連では、一九二六―二九年のあいだ、中国人の人口数は一六%ほど増加した。安全性と待遇の保障が移民たちの目当てであった。在日期間中に文権は「東京大正博覧会」(一九一四)で日中貿易館の担当者を務めたことがある。これが大連市長杉野耕三郎の彼を招いてくる理由となった。文権は、二五年に行なわれていた「大連勸業会」(大連市政府主催)の責任者に委任され、初の仕事を待た。その後、滿蒙文化協会の客員を務め、『東北文化月報』の主筆になった。二六―二七年のあいだに、盛京時報社と協議し、同新聞の付属刊行物として大連地方向けの『盛京時報大連版』を主宰した。

李文権ら中国人移民の大連到來は、大連詩壇の状況を大いに変えさせた。一九四一年に日本詩人の吉川鉄華(浩然社成員)は大連詩壇に対する回顧で次のように同詩壇の移り変わりを語った。⁽²³⁾

明治四十二年遼東新報社の社長末長鉄巖先生が浩然吟社を

創設されたのが滿洲に於ける漢詩社の濫觴である。(……)文学に興味のある上流階級の人は此の優美なる趣味に共鳴して加入する者が頗る多かつた。(……)大正一三年一月に田岡淮海先生が浩然吟社を中心とし、日支親善を標榜して「遼東詩壇」を刊行された。支人側は支人側として別に嚶鳴吟社なるものを組織し、(……)(中国詩人は)随時に詩会を開き、其詩稿は「遼東詩壇」に掲載することとし、(両国詩人は)互いに連絡を取り、時々連合詩会を開き、大いに詩道の振興に尽くされた。

大連詩壇の経緯は吉川の記述ではつきりした。一九〇九年に浩然社が設立されたが、そのときは、大連詩壇のメンバーが少なく、中国詩人がほぼいなかった。一九一〇年代に日中文化人の共同に参加する応酬活動が珍しく、二一年に嚶鳴社が設立されてから、状況が徐々に変わった。

『遼東詩壇』の発刊は大連詩壇の隆盛期を迎えるシンボルであった。文権は二五年に來連した後、嚶鳴社に参加した。文権と同様に、古典知識を有する中国人は、みなこの時期に大連に到着した。

具体的にみれば、彼らの中に「遺老」、「政治家」、「避難者」などがいた。遺老というのは、清朝時代に功名を取得し、朝廷に仕えた者たちで、民国期に新しい政府に奉仕することを断つ

た人物である。清朝に学部郎中を務めていた王季烈（一八七三～一九五二、字は君九）、学部二等諮議官を担当していた羅振玉（一八六六～一九四〇、字は式如）はその例である。二人はそれぞれ一九二七、二八年に閩東州に到着し、政治の紛争から離れ、学術研究に専念した。中国政治家は、例えば、蔡廷干（一八六一～一九三五、字は耀堂）、孫宝琦（一八六七～一九三一、字は慕韓）、王揖唐（一八七八～一九四八、字は慎吾）などがいた。彼らは民国政府の仕事をやめ、大連に移住した。かつて「北洋の虎」と評される段祺瑞（一八六五～一九三六）も、直皖戦争で失脚後、二六年に療養のため、大連に短時間滞在したことがある。彼も「中秋節日作十首三」や「奉賦青浦子爵」など八首の漢詩を『遼東詩壇』に寄稿した。²¹ 避難者について、文権は一例である。彼の他に、前出の楊成能、黄越川、陳錫庚なども戦乱から回避するために来連した。彼らは大連で商売をしたり、就職したり、生活の基盤を築き、余暇の時間をもって大連詩壇の活動に参加した。

三 大連日中詩人の齟齬

大連に移住してきた中国詩人は、漢詩を通して自身の経験と大連での感想を詠じ、その過程で一種の態度が形成された。大連についたとき、李文権は四七歳であった。「五十にして天命

を知る」という言葉はあるが、五〇歳にして自身の満足できる業績がなかったため、彼は常に運命の曲折を嘆いた。遼東半島で身を放浪する態度の表れる漢詩がよく詠じられた。

何須飲酒置膠東 何ぞ須いん 飲酒 膠東に置き
 拔劍長吁仰太空 劍を抜き 長吁して 太空を仰ぐを
 潦倒六年吾已老 潦倒たること六年にして 吾已に老い
 澆愁有術只杯中 愁を澆ぐに 術に有るも只だ杯中のみ
 「席上步淮海先生韻得二首」『遼東詩壇』第六四号、
 一九三二年）

この漢詩は日中詩人共同の詩宴で詠じられた。詩宴では愉快な雰囲気で行なわれていたが、彼の詩からその楽しさが感じられず、老いた自身に対する嘆きと落ちぶれた人生への悲観的な態度しか捉えられない。漢詩の中に、「六年」という表現が表れ、文権は、詩作を通して、大連に滞在している六年間をまとめ、「潦倒」の二字から、大連生活に満足していなかった気持ちが見える。歲月の流れで、青年時代に日本へ行き、中国のために経済情報を探るときに活力が喪失しつくしたように見受けられる。

彼の考え方は中国の社会情勢と深くかわる。満洲への移住は、多くの中国人にとってやむを得ない選択であり、戦乱の中

に生きていくためであった。宗風社の楊成能は「東北文化月報詩欄」の「序言」で次のように語った。「君子の皆様は世間の争いを腹いっぱい経験し、各々違う気持ちを抱いている。遠方からここに集まり、政治から遠ざけて、つまらなく過ごしている。世間の気風を観察する者は（この「月報」の詩欄から）何が得られるなら、この欄も無駄ではなかるう」と。⁽²⁸⁾楊は漢詩を世間の風潮が示せる道具として考えていた。彼の言葉から、乱世の中に中国文化人たちが共通的に隠遁の態度を取ったことが分かる。彼らにとって、漢詩は社会に対する啓示であり、実社会に出ようとすする者への吹き流しである。

ほかの中国詩人、例えば、羅振玉は次のような漢詩を詠じた。

十載桑隅逝水流	十載の桑隅	逝水流る
身今隠矣復何求	身は今隠れ	復た何をか求めん
哀時但有心如噎	哀時	但だ心の噎の如き有るのみ
対鏡還驚雪滿頭	鏡に対し	還た驚く 雪の頭に満つる

〔奉和二峰先生見懷之作〕『遼東詩壇』第六四号、
一九三一年）

民国に入つて、羅は清朝政權の蘇生を図つた。一九二四年に

溥儀の信頼を得て、その側近になつた。しかし、陳宝琛、鄭孝胥ら保守派との競争で負け、溥儀からの信頼を失つた。二八年に羅は旅順に赴き、「小朝廷」の事務から解放され、學術に専念した。そのときに、彼は山本悌二郎（二八七〇〜一九三七、号は二峯）と唱和し、自身の哀愁を表した。

漢詩の中に、「十載桑隅」は、一九〇一〜〇二年（教育視察）、〇九年（商務視察）、一一〜一九年（亡命）三回の日本滞在を指している。前二回は清朝官僚として、三回目は政治亡命者として来日した。一〇年間の日本滞在中、彼は曲折の人生を体験し、「身今隠矣復何求」の一句では、大連に「隱居」し、一旦落ち着くようになった気持ちが窺える。しかし、転句では、「哀時」と「心如噎」が表れ、羅が境遇に対する不満足の気持ちも伝わる。

政治家の段祺瑞は大連で療養する途中、次のような漢詩を詠じた。

当時豪傑士	当時	豪傑の士
已尽還北印	已に尽く北印に還る	
榮華浮雲去	榮華	浮雲のごとく去り
大夢若黃梁	大夢	黃梁の若し

〔旅大遊〕『遼東詩壇』第二七号、一九二七年、抜粋）

これは段の「旅大遊」から一節を抜粋したものである。漢詩を通じ、日清戦争下における中国軍の大連での戦いを懐古する。この一節で、段は中国戦士の大連撤退に対する感慨を洩らし、漢詩の最後に「榮華浮雲去、大夢若黃梁」を詠じ、歴史に對する虚しさの気持ちが見える。この句は彼の境遇にも重なり、隱遁生活を過ごし、人生に對する悲嘆とも理解できる。

一九〇五年に「科挙廃止」の法令が公布され、中国古典文化への習得が出世の道ではなくなった。これ以降、新しい知識人は西洋知識に関心を寄せ、古典文化の素養を鍛える若者が大幅に減った。一九年に「新文化運動」が起こり、古典文化はさらに中国の発展を阻害する「老朽の文化」として考えられた。二〇年代に來連する中国人に對する詳細の調査はないが、大連詩壇に参加するものは、年を取り、曲折の人生経験を有する人が多かった。李文権は詩宴で「主賓多是髮滄桑、星浦樓頭送夕陽（奎堂子爵歡迎宴賦此敬呈）『遼東詩壇』第一七号、一九二六年」を詠じたことがある。李文権らは漢詩を通して、「隱遁」と「避世」（俗世から離れる）の態度を表した。これは大連に赴いた中国詩人たちの潜在している共通認識であろう。

同詩壇の日本詩人側はどうだろうか。日本人の大陸植民史をみれば、一九〇五年の大連租借が大陸進出の始まりであり、滿蒙政策の出発点となった。初代南滿洲鉄道株式会社総裁の後藤新平は、一〇年間に五〇万日本人の移民目標を立てた。²⁶⁾しか

し、一九二六年の関東州の日本の人口は一八五二八四人で、予定の半分にも達していなかった。だが、中国の人口は八六六〇六人で、日本の人口の四倍を超えた。²⁷⁾人口比例の失調により、雑居社会の不安が増え、差別問題や労資問題などが起こった。社会情緒を緩和できる文化活動が期待された。漢詩の創作は大連文化の繁栄を促す一環となる。

山田武吉（生没年不詳、号は芙蓉、新聞主筆、浩然社成員）は大連に長く滞在していた者のひとりである。新聞主筆を務めている彼は『滿洲日日新聞』に「改めよ植民の動機」（一九二二年一月一日）「滿蒙における我が日本の特殊地位」（一九二六年一月一日）などの文章を執筆したことがある。

一九二五年に奉系軍閥が内訌し、将校の郭松齡（一八八三～一九二五）が張作霖を裏切る。そして、奉軍の混乱と南方政府の率いた北伐軍の推進は、滿洲にいる日本人は不安を煽ることとなった。このような事態に臨み、山田は、日本人の滿洲における特殊な地位を強調し、滿洲に對する更なる「開拓」を要求したのである。彼は次のように語った。²⁸⁾

滿蒙における日本の特殊地位なるものは、幾万人の生靈と何十億円の国幣を犠牲として築き上げたもので、特殊地位を構成する日本の権利並びに特権は、累次の条約、協約、その他種々の外交文書によって出来たものである。

(……) 権利及び特権を遺憾なく実現すれば、日本の満蒙における特殊地位は強固なものとなるのであるが、政府の退嬰外交と、その消極政策と、日本国民の海外発展に対する意気の銷沈とで、それが満足に行われて居ない。(……) 満蒙における我が既得権はまだ十分に行使されて居らぬに依り、満蒙の我が特殊地位を強固にするがため、此際更に満蒙政策の根本的立直しをする必要もあると思う。

山田の視点から、満蒙は日本が「犠牲」のうえで獲得した権益であり、列強と外交文書を交わし、その統治に「正当性」を持つ、との認識が窺われる。しかし、日本政府は消極の植民政策を実施し、「日本国民の海外発展」が十分にできなかった。「特殊地位の強固」と「満蒙政策の立直し」は日本の取るべき態度だと、彼は考えていた。

植民地大連に対する「開拓」の気持ちは、漢詩にも表れている。

開拓波濤万里心	開拓す	波濤万里の心
老来意気未銷沈	老来の意気	未だ銷沈せず
千言誰草治安策	千言	誰か草せん
自笑賈生憂国心	自ら笑う	賈生憂国の心

〔書感二首〕『遼東詩壇』第七号、一九二五年)

この詩は「書感二首」の第二首である。山田は人生の態度と抱負を詠じている。漢詩の中に、「波濤を開拓」し、「治安の策」を草する憂国の心情が表れ、老いた自分でも、漢代の賢臣「賈生」(賈誼)のようにまだ国に貢献する力があることを主張した。山田は一八年間も大連に滞在し、植民地大連に対する愛着が深かったと言えよう。²⁸⁾ 大連を開拓し、日本の利益を確保することは彼の望みであったことが分かる。漢詩を通して「開拓」の志を示す。山田の態度は、植民地当局と同調し、大連にいる日本詩人たちの中に共鳴者も少なくなかったかもしれない。

山田と同様に日本の植民事業のために尽くした日本人の中には、森懋(生没年不詳、号は琴村、浩然社成員)がいた。一九二七年に彼の友人林鶴堂(身分不詳)は南米と西欧に商工業を視察に行こうとした時、彼は次の漢詩をもってその旅を励ましていた。

宿志欲酬昭代徳	宿志	昭代の徳に酬いんと欲す
精忠豈只戰場功	精忠	豈に只だ戦場の功のみならんや
邦家深待殖民策	邦家	深く待つ
寰海頻吹貿易風	寰海	頻りに吹く

〔林鶴堂欲視察南米殖民地及西欧商工界將發來訪余於病蓐

叙別力疾呵筆賦七律二章以壯其行」『遼東詩壇』第二号、一九二七年、抜粋)

森はこの漢詩を通して自身の抱負を語っている。功績を挙げらるならば、戦場だけではなく、日本の国策に依じて海外で貿易し、「殖民」を行うことこそ、「宿志」を実現し、「昭代」の「徳」であると主張するのである。彼の漢詩は海外に行く友を応援するために詠じられたが、満洲にいる自身の立場をも反映していたと言えるだろう。

ほかに、日本の植民事業に貢献した者を謳歌し、更なる満蒙の「開拓」を望む漢詩が見受けられる。例えば、肥田野畏三郎（生没年不詳、号は錦川、浩然社成員）は大倉喜八郎の満洲における開拓を詠じ、「萊蕪拓到滿蒙野、千載応伝不朽功」（大倉鶴彦翁追悼祭典賦奠）『遼東詩壇』第五三号、一九三〇年）という。また、福田顕四郎（号は象外、浩然社成員）は満蒙殖産会社社長の向井龍造（一八七四～一九三〇）を詠じ、「富源大拓揮双臂、産業鴻成從兩肩」（悼向井龍造君）『遼東詩壇』第五九号、一九三〇年）と。とくに、この漢詩の後ろに付記があり、「向井君は精力と思慮を尽くし、（満洲の開拓）に多くの貢献をした」と記されている。

二〇年代に、満蒙における日本の特殊権益は、ワシントン会議で列強に承認され、確実なものとなった。しかし、中国国内

の民族運動と戦乱により、その植民統治は安定していなかった。必ずしも在連の日本詩人がみな政治事情に強い関心を持つたわけではないが、植民事業と国策に対する支持は、彼らの潜在的な志向の一種と考えられよう。

このように、政治を避けるために大連に辿り、唱和応酬に心酔する中国詩人と、日本の対中進出と植民地支配の志向に同調する日本詩人。両者は同様に漢詩を通して気持ちを表すというものの、その心情はすれ違っていたとみられる。

四 「日中文化親善」の提言

大連詩壇の中国詩人は「隠遁」の思想を有し、漢詩を通じて自我の表出を求めた。日本詩人は「開拓」の態度を持ち、率直に日本の国策を支持する気持ちを詠じる漢詩を執筆した。ここに、日中詩人の文化理解に齟齬が存在しているのが見て取れよう。そして、両国詩人たちのこのようなすれ違いを埋めるため、日本詩人の中より、田岡正樹が同詩壇の旗振り役として現れた。

一九二四年に田岡が大連詩壇の大黒柱となったとき、すでに六〇歳の高齢であったが、それでも日中同源の古典文化に対する愛着は弱まることを知らなかった。彼は次のように語っている。「日本の文学と美術は古代中国から伝わってきた。日本の

漢詩は中国の漢詩である。日本の文章は中国の文章である。日本の文人墨客は中国の文豪に憧れの気持ちを抱いている。(……) 文をもって交遊すれば、情が厚くなる」と。³⁰彼の言葉から、日中同源の古典文化に対する尊敬の態度が窺える。漢詩の源である中国に対し、敬意を持ち、日中詩人の共同の漢詩活動を通じて、古代以来の文化関係を継承することを望んだのである。『遼東詩壇』の発刊の詞で、彼は「文学で国交を促進し、(日中の)縁を結びつく」と語り、同誌の編集理念を定めている。「日中文化親善」の主張は、ここに提言されたのである。

彼の主張はその漢詩を通して表れた。一九二四年の「蘇軾生辰会」で彼は次のように詠じた。

一代詞雄隔千載 一代の詞雄 千載を隔つ
 兩邦騷客倚層樓 兩邦の騷客 層樓に倚る
 今宵雅会須酣醉 今宵の雅会 須らく酣醉すべし
 壬戌追隨既幾秋 壬戌を追隨すれば 既に幾秋ならん
 (甲子十二月十九日、邀飲嚶鳴浩然兩詩社諸吟壇於登瀛閣、用為東坡生日雅集、賦此志感、並索高和、二首)『遼東詩壇』第四号、一九二五年)

この漢詩で、彼は詩宴の様子を描く。「兩邦の騷客」が共通する文化主題のために、お酒に酔ったとしても、宴会を休まず

に続くという理想の状態を謳歌したのである。両国の親交への期待は漢詩の中に含まれていたと考えられる。

彼の主張は、ほかの日本詩人に受け入れられた。吉川鉄華は一九二七年に日中詩人の「月見会」で次のような漢詩を詠じた。

朝来一雨火雲收 朝来 一雨 火雲收む
 風拂林梢氣已秋 風は林梢を拂いて 氣已に秋なり
 此夕西園觀月宴 此夕 西園觀月の宴
 兩邦騷客泛觴舟 兩邦の騷客 觴舟を泛ぶ
 (即興二首(録二))『遼東詩壇』第二六号、一九二七年)

吉川も「兩邦の騷客」という表現を使い、詩宴で田岡と同様の心情を示している。

また、日本本土からの視察者も「文化親善」を趣旨とする詩宴で漢詩を詠じたという。一九二六年に来連した清浦奎吾(一八五〇～一九四二、号は奎堂、政治家)が詠じた詩は次の通りである。

鴻雁高飛入遠蒼 鴻雁 高く飛び 遠蒼に入る
 茱萸黃菊近重陽 茱萸 黃菊 重陽近し
 文星相会星浜夕 文星 相会す 星浜の夕

詩氣横秋凜似霜 詩氣 秋に横たわり凜たること霜の
似し

〔星浦雅集即賦併希諸賢祭政〕『遼東詩壇』第一七号、
一九二六年)

清浦の大連到来は同詩壇の日中詩人に歓迎されることであった。彼は、山東省の孔子廟や泰山などの名勝地を訪問し、各地の中国文人と交流することを目的としたが、大連はその目的地の一つであった。この漢詩に、彼は「文星相会」という言葉を利用し、日中詩人との交流を楽しむ態度を示している。また、「文化親善」に対する支持も捉えられよう。

日本詩人の主張に対して、中国詩人側はどのように受け取ったのだろうか。李文権は積極的に日本詩人の文化理念に呼応した一人であった。八年間の大連滞在で、実に二八回も日中詩人共同の応酬活動に参加した。⁽³¹⁾「蘇軾生辰会」のような大規模なイベント(三〇人以上の日中詩人が参加)は一九二四年から二年ごとに主催されたが、二五年の来連後、彼は毎回参加している。また、三〇年の例会は彼により主催されたものであった。ほかに、小規模な集会にも参加し、詩宴で創作された詩は『遼東詩壇』に確認することができる。

一九二六年に田岡正樹が四川に旅立ち、日中詩人たちが「送別」の詩宴を行った。文権は田岡と唱和し、次のように詠じて

いる。

正陽楼上昔曾遊 正陽楼上 昔曾て遊び
吾輩心乗共濟舟 吾輩 心に共濟の舟に乗るべし
我尚焉留君又去 我尚ほ 焉に留まるも 君又た去り
中秋月照蜀江秋 中秋の月は照らす 蜀江の秋
〔送淮海先生之蜀〕『遼東詩壇』第一六号)

この漢詩には一行の付記があり、「かつてともに正陽楼で少牢を食べたことがある」という。「少牢」は祭りのお供え物である。祭り儀式が終わると、参加者全員で食べるという慣習があった。文権と田岡はともに中国伝統行事に参加し、同様な文化趣味を持っていた。二人の関係は共通の文化理念のもとに構築された。この漢詩の承句で、文権は「吾輩心乗共濟舟」と詠じるが、友情を重視する気持ちは窺われよう。詩句の中に、大連詩壇の調和、また両国友好に対する祈願が含まれているとも考えられる。

楊成能は、日中詩人が共同で作成した詩集「連交唱和集」(田岡編集)の「序文」で次のように語った。「私は詩の創作が苦手で、偏屈な性格を持っている。しかし、大連に到着し、嚶鳴社と浩然社の諸君と応酬唱和をすることができ、胸に蓄積した陰鬱な気持ちがあつたと霧消した。心の中の宇宙が平然とな

り、この世の中に、いばらの生える場所がどこにもなくなるように感じたのだ。田岡淮海氏は大連詩人の中でも優れた人物である。私の心を惹いたものでもある。彼は独自に雅集を開き、「赤壁会」を主催し、両社詩人の文章を一堂に収めた。(……)唱和した詩を一冊の詩集に集め、風雅を楽しむ読者に対し、参考になることができる」と。⁽³²⁾

また、黄越川も同詩集に「序文」を書いている。「一年間も経たないうちに盛大な詩宴は八回も行われ、詩人たちは奮って参加し、よい詩作が続々と現れた。同文同種を唱える漢詩を一冊に集め、(……)これこそ国交の構築に必要なものである。(……)私は西湖からやってきた末流の詩人である。才能がなく、詩に対する考えが常に枯れている。(……)辛うじてこの序文を草し、詩人の諸君からの批評を期待する」と。⁽³³⁾中国詩人は田岡の編集活動に賛意を表し、その「文化親善」に同意する態度を示した。また、楊は日中共同の詩宴が彼の陰鬱さを晴れさせた、詩壇活動の彼に及ぼした積極的な影響を語った。

日本詩人の提言した「日中文化親善」は中国詩人たちに広く認められ、彼らの漢詩創作に反映された。中国詩人は「隠遁」の態度を持っており、日本詩人側は「開拓」の目的を有していた。このように、両者のあいだには齟齬が存在したのである。しかし「文化親善」の提言は、両者間の齟齬を和らげ、大連詩壇における両者間の協力関係を促進させたのである。

五 大連詩壇の凋落と李文樞らの大連退去

大連詩壇の衰退は一九三〇年ごろから始まった。それとは逆に、南京政府の樹立をきっかけに、中国の国内情勢は安定化していく。それと軌を合わせるようにして、大連詩壇の中国人は他所に転居し、年配の詩人たちは他界するなど、詩壇成員の数は減る一方であった。三一年には満洲事変が勃発するが、その翌年には「満洲国」が建国されている。これら一連の政治的な事態は、同詩壇の凋落を加速させた要因であったのである。

ここで、「満洲国」建国の年、一九三二年に刊行された『遼東詩壇』(第七七号)を見てみよう。本号は、「満洲国建国記念号」と題されている。内容としては、「満洲国執政官宣言」「溥儀の就任の辞」「満洲国政府の対外通告」など、政令が掲載されているのが特徴的である。また、掲載された漢詩の中には、「満洲国」の成立を祝うもの、例えば、木下彪(一九〇二～九九)の「満洲建国歌二十首」や、古澤北冥(一八七二～一九五二)の「満洲国元首推戴日率賦志感」などがある。さらに、杉本重民(生没年不詳、浩然社成員)の漢詩「肉弾三個」が掲載されている。この漢詩は、三二年に上海で起こった日本軍の中国軍に対する襲撃(第一次上海事変)を称揚するが、その具体的な内容は次の通りである。

王師応懲義薄雲	王師 懲に応え 義薄雲のごとし
陸海將兵誓樹勳	陸海將兵 勳を樹つるを誓ふ
敵軍各物頻防戦	敵軍の各物 頻りに防戦するも
三士肉弾玉石焚	三士の肉弾 玉石焚く
嗚呼壯烈鬼神泣	嗚呼 壯烈にして 鬼神泣き
長伝青史照斯文	長く青史を伝えて 斯文を照らさん

〔肉弾三個〕『遼東詩壇』第七七号、一九三二年より、抜粋)

杉本は日本の侵攻を「長伝青史」の事績と見なしているが、この考えは、田岡正樹の主張した「文化親善」とかけ離れていることが一目瞭然である。しかし、当時の日本側の視点では、対中軍事行動は日本の利益を確保するための行為であり、それを詠じる漢詩は日本の国策に応じる言動だと受け取れよう。このような漢詩が掲載された結果、中国詩人の神経を尖らせたことも想像するに難くない。

二〇年代の『遼東詩壇』は、政治関係の文章や漢詩を掲げることがなく、第七七号に掲載された「満洲国」政府の通告文と、日本人の対中侵略の意図を示す漢詩が、その初めての例であった。このことから、同誌はそれまでに堅持してきた「日中文化親善」の態度を、この時点で変えたと考えられる。

この「満洲国」の建国という事態は、満洲に拠点を持つ文学者たちにとって大きな出来事であった。例えばその一人である山口慎一（筆名は大内隆雄）は、『満洲文学二十年』のうちで、満洲の文芸雑誌『高梁』の刊行にあたって掲載された「満洲国独立の精神」について触れている。全体として、満洲の文学界は政治情勢に同調し、「満洲国」の建国理念を日本人以外の諸民族に対して、受け容れさせるための喧伝活動に従事していたのである。⁽³⁴⁾

大連詩壇の変化もまた、満洲の文学界と同じように、世論喧伝の一環として考えられる。大連詩壇の変化に際し、中国詩人は同詩壇を敬遠するようになった。一九二八年頃、『遼東詩壇』の最盛期には、一号ごとに平均七〇首の漢詩が掲載され、そのうち中国人の漢詩は四〇首ほどで半数を超えていた。⁽³⁵⁾しかし、満洲事変後、漢詩の掲載数は五〇首までに減少し、中国詩人の掲載数も減り、第七八号では一首も掲載されていない。漢詩寄稿数の多い中国人には、例えば前出の黄越川や陳錫庚などいるが、彼らは寄稿しなくなり、李文権も寄稿しなくなったのである。

二〇年代における大連詩壇の繁栄は、日中詩人間の盛んな交流による結果であった。三〇年代にはその繁栄は衰退に転じ、中国詩人たちの沈黙は、彼らの対日態度を示すものとなったのである。満洲事変の勃発と「満洲国」の建国により、政治から

遠ざかる「隠遁」の考えを有していた中国詩人たちは、再び激烈な政治問題に巻き込まれるようになる。そのため、彼らは大連を離れ、無言の抵抗を示したのである。その一例を挙げれば、詩人黄棣華（一八七一〜？、字は偉伯、嚶鳴社成員）は一九三一年に大連を去っていき、故郷の広東順徳に帰った。一九四七年に彼は自身の詩集「負暄山館詞鈔」で、「六十歳の頃、遼東から（広東）香島に帰り、九龍塘で静かに暮らすようになった。漢詩とお酒をもって一人で（余生を）楽しんでいった」と述べた。³⁶ 大連を離れる具体的な理由が記さなかったが、満洲事変の勃発はその帰郷と無関係ではないと考えられよう。その大連を立ち去った中国人の中の一人に、李文権がいる。一九三二年、彼は「満洲中央銀行」の職員になり、のちに長春に移住する。彼が『遼東詩壇』に寄稿した最後の漢詩は、次の通りである。

万人口頰閩都督	万人の口は頰む	閩都督
偃武修文望大同	偃武修文	大同を望む
今日興京追往事	今日	興京にて 往事を追
後先媲美祝成功	後先	媲美して 成功を祝う

（「賀閩市長榮任」『遼東詩壇』第七七号、一九三二年）

この漢詩は、大連有力者の閩伝紱が奉天市長に任命されたと

きに詠じられたものである。承句には「大同」という表現が見えるが、これは「満洲国」の年号であり、「満洲国」の政治理念でもある。文権が大連を離れ、「満洲国」の首都となる長春に移住したことを考慮するとき、この漢詩には彼が「大同」の理念を受け容れ、あるいは少なくとも配慮していたことがわかる。一九二〇年代、文権は「為演芸事業上土方伯爵書」や「始政二〇年記念之我見」³⁷ など多くの文章を発表し、そこでは積極的に日中提携を唱えていた。三〇年代以降、彼は言論界を離れ、新聞雑誌に日中提携を主張することはなくなるが、満洲事変をきっかけとする大連詩壇の衰退にともない、「満洲国」という新しい場に参画していくのである。

「満洲国」の建国により、満洲地方政治の中心地は長春に移転する。これに伴い、中国人は大連から退去した。その事態は大連詩壇の人員流失を加速させ、二〇年代に主張された共通認識も消失していったのである。日中交流の土台が崩れ、日中詩人間の齟齬が再び顕在化する。日中提携の場として模索された大連詩壇は、一九三六年の『遼東詩壇』の廃刊とともに、最終的に幕を閉じたとみなすことができよう。

おわりに

本稿では、李文権の視点から大連詩壇の日中詩人交流と、同

詩壇が凋落していく過程を論じた。

一九二〇年代以降、植民地大連の開発により、当地の商工業が発展したが、中国国内では軍閥による内戦が頻繁に起こり、大量の中国人が大連に移住してきた。その中には李文権らが含まれており大連詩壇は繁栄したのであった。

しかし、日中の詩人は社会背景を異とし、故に異なる態度を持つていた。避難のために来連した中国詩人の多くは、政治や世間から遠ざかる「隠遁」という考え方を持つていた。一方、日本の詩人側では、国策を支持し、漢詩を通して「開拓」の理念を詠じたのであった。日中詩人間には、かような齟齬が存在していたといえよう。

このような状況下、日中詩人の齟齬を埋めるため、大連詩壇の中心的な人物・田岡正樹は「文化親善」を提言し、それを『遼東詩壇』の編集方針にした。李文権ら中国詩人たちはその主張を支持し、日中の漢詩交流は隆盛を極めたのであった。

しかし、程なくして一九三一年に満洲事変が勃発し、翌年に「満洲国」が建国された。その時、『遼東詩壇』は「満洲国」の成立を喧伝し、従来 of 政治に関わらない態度を捨てたのであった。中国詩人は大連から離れ、日中詩人の共通認識が崩れた。李文権は大連から長春に赴き、「満洲国」に参画していくことにした。ここに、大連詩壇は幕を下ろしたのであった。

注

(1)

『遼東詩壇』の収蔵状況について、日本では、東京大学、国際日本文化研究センター、二松学舎大学などで収蔵がある。中国では、「全国報刊索引」データベースにも一部分収録された（ホームページ <https://www.cnkksy.net/home> 最終アクセス日二〇二二年一月一八日）。本研究は中国側のデータベースと他の場所に収蔵されるものを併用した。

(2)

李文権に関する先行研究は、李鵬「李文権実業観研究」中国華中師範大学修士論文、二〇一三年。王弘「『中国実業雑誌』と『他山百家言』から見る洪沢栄一の対中合弁事業に至った経緯」『ICCS現代中国学ジャーナル』第一五卷（一）、二〇二二年、三四～四七頁、などがある。しかし、これらの研究は李が大連滞在中の状況に触れなかった。なお、李文権の没年については、これまでの研究では不分明であったが、筆者が李の遺族に行ったインタビュー調査により、「一九三六年没」という事実が判明した。この点については、別稿での報告を予定している。

(3)

『遼東詩壇』に関する作者情報の整理は、孫海鵬「『遼東詩壇』研究」により行われた。同文は『遼東詩壇』に関する初めての論文で、大連図書館の公式サイトに掲載された。ネットで掲げられたもので、同文の巻号、頁数、発表年についての情報は不明である。ホームページ http://www.dl-library.net.cn/publication/pub_content.php?id=422 を参照（最終アクセス日二〇二二年一月一八日）。筆者は孫研究のうえ、詩人たちの採用数を比較し、「二〇番目」という李文権の詩人の中における順位を確定した。文権は大連詩壇で活躍していたことが証明できよう。

- (4) 入谷仙介「剪淞吟社と中国」『中国文学の比較文学的研究』(古川敬一編)汲古書院、一九八六年、二八七～三三三頁。
また、入谷仙介、大原俊二著『山陰の近代漢詩』、山陰の近代漢詩刊行会、二〇〇四年、を参照。
- (5) 柴田清継「漢学者松崎鶴雄 その民国文人との文化交流―大連在住期を中心に―」『日本語日本文学論叢』二〇一一年三月、一五～三三頁。
- (6) 中嶋謙昌「大連における杉原謙(遊鶴)―「外地」の能楽界と漢詩壇―」『国語国文』第六八巻第六号、二〇一七年六月、五七七～五八六頁。
- (7) 同前掲注(3)、孫海鵬「遼東詩壇」研究」。
- (8) 焦宝「遼東詩壇」中的中日古典詩歌考」『社会科学輯刊』二〇一四年一月、一八三～一八七頁。
- (9) 李勤璞「嚶鳴社及其詩鈔」『遼寧省博物館館刊』二〇一一年一月、三三三～三九五頁。
- (10) 元豊五年、蘇軾が赤壁を訪ねた。それ以来、後世の詩人たちは蘇軾を記念するため、「赤壁会」を名義にした詩会を開く。
- (11) 下東波「漢詩・雅集与漢文学圈的余韻―一九二二年東亜三次赤壁会考論―」『安徽師範大学学报』二〇一九年一月、二三～三三頁。
- (12) 湯蘭昇、楊力生「殖民当局対大連的輿論統治」(李振遠編『長夜・曙光―殖民統治時期大連的文化芸術』大連出版社、一九九九年、二一七頁)で、二九五種というデータを算出した。同研究の依拠は、東北地方文献連合目録編集組『東北地方文献連合目録(第一輯)』東北地方文献連合目録編集組出版、一九八一年である。
- (13) 満洲の文学発展状況、及び文学者の紹介について、西創生編『満洲芸術壇の人々』曠陽社、一九二九年、を参照。
- (14) 同前掲注(3)、孫海鵬の算出を引用した。
- (15) 例えば、『大阪毎日新聞』における漢詩欄は一九一八年に、『大阪朝日新聞』の漢詩欄は一九二五年に撤去された。(福井智子「日本の近代化と漢詩の位置」大阪大学博士論文、二〇〇一年、二八頁と三七頁。)中国側では、『太平洋』『国民』などの雑誌の漢詩欄は一九一七年から撤去される。
- (16) 尹奇吟「民国時代の旧体詩詞的刊印伝播」『出版科学』二〇一一年三月、第二期、一〇七頁。
- (17) 桑兵「民国学界的老輩」『歴史研究』二〇〇五年一月、第二期、三～二四頁。
- (18) 杜山居士「田岡淮海を哭して」『土佐史談』(五六)、一九三六年第六期、一一五～一一八頁。
- (19) 東三省官紳録刊行局『東三省官紳録』東三省官紳録刊行局、一九二四年、一九三頁。
- (20) 『中国実業雑誌』の刊行は二つの段階がある。一九一〇～一九一一年に『南洋群島商業研究会雑誌』という名前を使った。一二年に『中国実業雑誌』に改めた。
- (21) 同誌に対する整理を通して算出した。
- (22) 林道乾、中国華南地方(福建省あたり)の出身で、明朝嘉慶帝の時期に政府に対抗する海上武装集団を組織し、明朝の統治に反抗した。のちに敗北し、台湾を経由して南洋へ逃げる。タイ南部に転居し、当地の政治紛争に巻き込まれた。タイ当地政府のために大砲を製作し、華僑に英雄視される。文権の漢詩から、彼は林道乾を早期的に中国の南洋進出を行う模範として見なしたことが分かる。
- (23) 大連人口の増加状況について、『関東庁統計書』関東長官官

- (23) 房文書課、一九二〇～一九三〇の「戸口静態」の部分で示したデータにより算出した。また、一九二三年から三〇年まで、中国の内戦により、二九〇万人の華北人が満洲に移住したという説がある。平野健一郎「一九二三年の満洲」（平野健一郎編『近代日本とアジア—文化の交流と摩擦—』東京大学出版会、一九八四、二四四頁）。
- (24) 吉川鉄華「満洲漢詩界の回顧」満洲タイムス社『満洲タイムス廢刊記念謝恩誌』一九四一年、一八九～一九三頁。
- (25) 段祺瑞「中秋節日作十首三」『遼東詩壇』（第一六号、一九二六年）、「奉賦青浦子爵」（第一八号、同）、「詠雪二律」（第二三号、一九二七年）、「策国篇」（第二四号、同）、「賦答修慧長老」（第二六号、同）、「旅大遊」（第二七号、同）、「時局要人集」（第六八号、一九三一年）。
- (26) 楊成能「文化月報詩欄序言」『遼東詩壇』一九二九年第四一期、二七～二八頁。原文「諸君子皆飽經世患，各有胸懷。適從何來，據集於此。無聊坐獻，如出一轍。觀風者倘自得之，不求白也。」
- (27) 後藤新平「滿鉄総裁就任情由書」鶴見祐輔『後藤新平』一九三七年、復刻版、勁草書房、一九六五年、第二卷、六六頁。
- (28) 『関東庁統計書』（関東長官官房文書課、一九二六年）の「戸口静態」の部分で示したデータにより算出した。
- (29) 山田英峰「滿蒙における我が日本の特殊地位」『満洲日日新聞』一九二六年一月一日。
- (30) 山田武吉「自序」『草莽文叢』大日报社、一九三六年、一～二頁。
- (31) 田岡正樹「田岡序」『嚶鳴社詩鈔』一九二六年。原文「日本之文学美術発源於古支那。日本之詩、中国之詩也。日本之文、即中国之文也。日本之詞客文人、对中国之文豪詞雄固心焉慕之。……以文相識，愈交愈厚。」
- (32) 『遼東詩壇』に対する整理を通して算出した。
- (33) 楊成能「連交唱和集序」『遼東詩壇』一九二九年第四八期、三～六頁。原文「余也，雅不善詩，性尤孤介。自来連浜，得與此間所謂嚶鳴詩社、浩然吟社諸詩人追隨吟嘯，恍然覺胸襟浩蕩，宇宙清爽，不知人世間復有何処能容荆棘生也。田岡淮海者，此間詩人之翹楚，而余所尤為心折者也。因其自主催雅會，紀念蘇長公赤壁前遊，薈萃兩社詩人之篇章。……於是連交集之刊印，以質夫世之寄情風雅者。」
- (34) 黃越川「連交唱和集序」『遼東詩壇』一九二八年第三三期、三六～三七頁。原文「流年未及一週，盛會曾經八次。韻事端推韻客，吟哦不少鴻篇。同文並属同声，紀念庶成免冊。……邦交有賴。……（余為）西湖末學，江文通思路常枯。……勉作麗文，勝拜賜於百朋。」
- (35) 山口慎一「満洲文学二十年」国民画報社、一九四四年、一七七～一八〇頁。
- (36) 同前掲注(31)。
- (37) 黃棣華の「負暄山館詞鈔」における言葉は、孫海鵬『翼廬備譚』万卷出版公司、二〇一〇年、二〇二頁より間接引用した。
- (38) 「為演芸事業上土方伯爵書」『盛京時報大連版』第一七号、一九二六年七月二十九日。「始政二〇年記念之我見」『盛京時報大連版』第一八号、一九二六年八月五日。